



「パブルのころは、お客が減った。目新しいものに夢中だったから。最近はずいぶん古いものが見直されている」／撮影・近藤悦朗＝東京の全国伝統的工芸品センターで

漆器クリニック開いて18年・柴田 康時さん

人あり

塗り物はけた重箱、縁が欠けた
り中が変色したりしたお椀、取っ
手がとれた酒器……

一つずつ手にとって「大丈夫、
修理できます。漆は接着剤のよう
な役も果たすので、くっつけたり
埋めたり、塗り直したりできるの
です」。

東京・青山の全国伝統的工芸品
センターで、月一回の「漆器クリ
ニック」を開いて十八年になる。

毎回、三十人ほどから相談があ
り、修理を引き受けるのは約八
割。それを石川県・輪島の自分の
工房の職人たちの元へ送る。

持ち込まれるのは、ほとんどが
戦前のも。修理がきくとわかった
途端、「よかった。思い出の品な
んです」と声が上がります。

本業は、都内新宿区の輪島漆の
漆器を売る店の主である。一九
四七年、輪島で三代続く塗師屋の

次男に生まれた。慶応大商学部を
卒業後、地方銀行に就職し、三年
半東京支店に勤めた。

「たまたま長期休暇で帰郷した
時、一緒に酒を飲んでたおやじ
がボツリと『帰ってきてくれん
か』という。それもいいかなと思
い、家業を手伝いながら漆器の製
造や販売のシステムを勉強した。

七八年に独立し、店を持った」
伝統的工芸品センターは、七九
年に国や業界などが工芸品の普及
を目的に作ったが、柴田さんは開
股当初から縁が深い。漆器に時給
や沈金を施す教室を主宰するうち
に、修理の相談を受け、自然発生
的にクリニックが誕生した。

漆器は海外では「ジャパン」と
呼ばれ、日本を代表する工芸品兼
実用品だ。輪島漆は、黒や朱色の
漆を何度も塗り重ねるので堅くて
丈夫。高級料亭や旅館で使われる



修理を終えた漆器。塗り直しの
場合、半年かかり、お椀が2000
円、重箱が7000円

修理通じ思い共有

「修理が終わると社状が五通、十
通と届き、歸った思いを共有
する。漆器の命は長い。ある重箱
の持ち主は「昔、母が私の運動会
におにぎりを入れてくれた。娘の
運動会に間に合いました」。先祖
伝来の仏前用の膳を直してもらっ
た主婦は「やっと気持ち落ち着
きました」。

これまでに修理した漆器は八、
九万点に及ぶ。五十一歳になって
思うことがある。

「漆器は生き物。高価ではない
品でも長年大事に扱われて、品が
いい年の取り方をしたものがあ
る。一方、元は高級品なのに、い
じけた年寄りみたいなものも。私
もいじけた年寄りみたいだね」

(松原 照子)

「医師、柴田康時さん
のアドバイス

漆器

長持ちには扱い方ひとつ

「漆器病院」は、五十七で、これまでに約二千人が
年八月、東京の全国伝統的 来院、同病院では無料で診
工芸品センター（港区南青 断に応じ、依頼者の希望で
山三ノ一ノ一）の中に開設 石川県の輪島市の漆職人の
された、漆器の修理相談所。もとに送り、手箱・してい
毎月第二水曜日が、診察日。このほど三日間にわた
祝いの品だとか、漆器には

から大切にしよう、一年 柴田さんは言う。
に一、二回しか使わず、あ 職人たちの入念な手仕事
とはしまったまま、しまいで作られた漆器は、修理可
方も、天板など高い所に置 能で、未代まで使える。と
く人が多いのですが、これ だって、新しく作るより
は困ります」と続ける。 よっては、新しく作るより
漆器は乾燥させると、漆 もめんどうなことも。ケヤ

がはがれる恐れが出る。ほ キの木クスの入った漆を塗
ど良い湿度が必要で、東日 っ、磨き、さらにとこの
本や北海道では、桐の下段 を混ぜた漆を塗る。再び磨
など、部屋の下の方に置く いて、中塗り、上塗りとい
方が、自然の湿度を受けや 程を重ねるので、四五月か
すい。「漆器は下にしまっ ら六カ月から入院。
一と覚えて下さい」という が必要だ。「どんなけがで
のが、柴田さんのアドバイ も治るのが漆器のよいと
すだ。 だからと言って、乱雑

「上等の漆器でも、カラ に扱ってはいけないという
カラに乾いた部屋に一年置 そうではありません」
けは、漆がやせてきます。 水につけたままにしな
さらに四、五年たつとビ い、柔らかい布で洗つなど、
が入ってきやすから、乾燥 ちよつとした心配りと優し
には要注意。また、長い間 さが漆器を長もちさせる。
棚をのし、ときでいわすと 手軽さ、便利さ優先の時代
も、店頭に並べられている だからこそ、こんな気配り
うちに保存が悪いと乾燥し の意識も大きいのかも知れ
ている場合もあります」とい



「家庭でのしまい方が
悪いばかりに、大切な漆
器が泣いていきます」。こ
う話すのは、このほど札
幌・五音館で開かれた東
京・青山伝統工芸校歩道
の特別コーナー、「漆器
病院」の、医師・柴田康
時さん。お正月に使用
と、引っぱり出した漆器
が大嫌いになっていたし
なんていうことのないよ
うに、上手なしまい方を

乾燥、高い所避ける 柔らかい布で洗って

それぞれ深い思い出がある

札幌で開かれた「漆器病院」。「しまい方が悪い
人が多いですね」と、医師、の柴田さんは嘆く

よつです」と柴田さんは
言う。「せっかくの漆器だ

ヒビ割れ大丈夫ですか？



さまざまな漆器の“診断”をした柴田さん＝昨年6月、五番館デパートで

一日から二十六日まで、札幌の柴田康時さん。漆器は乾燥させると漆がやせてはがれる恐れがあるので、時々

「漆器病院」は、東京の全国伝統的工芸品センターも、乾燥した所はさけた方
―港区南青山三ノ一ノ一―
所で、五十七年八月以来、漆器の相談や修理を行って
月一回を、診察日に当て、乾燥が原因のトラブルとい
いる。札幌での「病院開設」
は、昨年六月以来今回で三
回目。

高価なものが多い漆器
は、大切に扱おうと、年に
一、二回しか使わずしまっ
たままになっていることが
多いが、「実はこれは漆器
にとっては、たいへんかわ
いそうなこと」と、同病院
漆を塗っては磨く、という
手間をかけるため、四カ月
から六カ月の「入院」が必
要だ。そのため、石川泉輪
島市の漆職人のもとに送っ
て、修理する。

漆器病院きょうから診断

札幌・五番館
26日まで

「大切にしまっておいた見えてしまっている」―こ
皇箱の漆がヒビ割れしてきんな漆器の「病気を診断
た」―塗りのわんの木肌がする「漆器病院」が、二十

再生漆器 使わない

古い漆器類をしまい込んでいませんか。死蔵している漆器を再生して、「リポーン漆器」として売り出すため、「伝統工芸青山スクエア」(東京)では、提供を呼び掛けている。

■丈夫で安全

英語で「ジャパン」といえば漆器を指すように、漆器製品は日本の特産品の一つ。かつては嫁入り道具とされていた重箱やわん、膳

「本物の漆器をもっと使ってほしい」とリポーン漆器を薦める柴田さん



価格は新品の3分の1

会津塗(わん)

などをはじめ、すずり箱や名刺盆なども漆で作られていた。ところが、扱いが楽で安価なプラスチック製品が主流になり、漆器類は使われなくなってきた。

古くなった漆器は、つやもなくなり、ひびが入っていることもある。それを直してくれる場所も見当たらないため、捨てるに捨てられず、戸棚の奥にしまっている人も多いはずだ。

る。

■消費者もメリット

「リポーン漆器」とは、消費者が使わなくなった漆器を無料で提供し、産地の職人が塗り替えて、再び市場で新品より3分の1以下の価格で売り出される仕組みだ。消費者にとっては安く手に入り、職人には仕事になり、双方にとってメリ

ツトがある。その橋渡しを同店が行う。本県の会津塗はもちろん、大堀相馬焼、会津本郷焼、奥会津編み組細工なども扱う。さらに展示・販売もしており、震災復興支援として2月に大堀相馬焼展を開催。現地の職人を招いて制作実演を行った。

同店で漆器の修理や相談を担当している柴田康時さんは、「もっと漆器を手軽に使ってほしい」と語る。家庭にある製品の見分け方は、例えばわんの場合、本

物の漆製品は口の部分より底の方が厚く、同じ厚さならプラスチック製だ。使わなくなった漆器を、もう一度よみがえらせてみては。問い合わせは伝統工芸青山スクエア(電話03・5785・1301)へ。

使い残った粉製品

ダニの繁殖に注意

使い切れずに残ったホットケーキ粉やお好み焼き粉、チヂミの素などの加工粉製品を長期間、戸棚に置いたままにしませんか？一度開封すると、常温

家庭便利帳

■足をリフレッシュ

抗菌作用のあるラベンダーやカモミール・ローマンなどの精油を、冷水を入れて洗面器に1〜3滴垂らし、両足を浸すと、皮膚も清潔になり、足がリフレッシュする。

東京・港区に 漆器病院

漆器というと大切にせず、とがく宝の持ち腐れになりがちですが、高価な品だけに傷ついたり変色したり、どこで修理したらよいか分からないまましまいい込む、というのもうなすけません。そんな声にこたえて、東京・港区の全国伝統的工芸品センター内にこの八月から月一回、漆器病院がオープンしました。修理を希望して病院を訪れる人はひっきりなしで、診断役を引き受けている柴田康時さん(左)は、休む暇なしの繁忙ぶりです。

漆器は生きもの

「漆器は生きものです。だから傷むのは当然で、傷めば修理して使えばいいんです。ひび、欠け、色はげ……どんな傷み方でも、修理のきかないものはありません」と柴田さんは



の。変色したら塗り替え、ひびがはいったり、欠けても修理しながら使っていくのが漆器の扱い方だ。そうで、そうすれば百年でも使用出来る。輪島塗で有名な輪島市の一般家庭では、漆器は修理さえすれば新品同様になることを知っている。日用の器として気軽に使われている。

輪島市へ送られ修理

ひび、欠け、色はげ……何でも

☆☆☆☆
塗師家の診断で
しかし生産地以外に住む

消費者にとっては、どこで修理してもらった方がいいのか分かりません。買った所が分かっていれば、そこへ頼むことも出来ますが、母の代から使っているとか、もらい物となると修理だけ頼む、というのは気がひけます。そこで気軽に相談や修理ができる場所はないだろうか、以前から全国的に伝統的工芸品センターに、問い合わせがしばしばあったそうです。

毎月第二水曜日の午後一時から四時まで、柴田さんは同センターの研修室で診断を行っています。柴田さんは輪島市出身の塗師家(ぬしや)。分かりやすく言えば漆器製造販売業といったところ。専門家の目で、まず修理すべきかどうか、修理の内容、費用の見積もりを行います。修理代は部分修理で二千元(実費)から、修理されると決まった漆器は、輪島市の技術者のもとに送り届けられます。修理には最低三カ月が必要。輪島塗の技法で行いますが、もちろん修理は他産地の漆器も快く引き受けています。

☆☆☆☆
アドバイスも

「買い替えた方が良いでしょう。買いますから、その時はそう勧めます。」(同センター)に陳列されている漆器を見ていたけば、値段は見当がつかずか

ら、もちろんたれかの形見だとか、お祝いにもらったものとか、金銭的価値ではない思い出のある品物で、なるべく意に沿うようにして使います」と依頼者の立場を尊重します。

しかし「今様の安い物を買って二、三年使った駄目になったから直してほしい」というのでは困るんです。漆器は塗り替えが出来る物を買って下さい」と、柴田さんは、漆器の選び方、使い方のアドバイスもします。

八月にオープンして以来三回の受け付けですが、約百二十人が相談、依頼に訪れました。

重箱を持参した三十代の主婦は「ひび、はげた角の部分修理を頼みました。一万八千円かかるとのことですが、買い替えるよりは安いです。それに母が使っていたものだから、なんといっても愛着がありますので」と言っていました。ほとんどの方が三、五年以上使っているという品物を持参していました。柴田さんは「長く使っていてほしい、という物はぜひ直し

傷ついた重箱の修理の相談を受ける柴田さん(左) 東京・港区の全国伝統的工芸品センターで

てあげたい」と言います。

座卓などのように持ち運びのできない大きな物は、一は東京都港区南青山三ノ木部分分がかりやすいよ、一ノ一 03-4033-2460。「漆器はばた」は写真を持参すれば相談に応じています。また月一回の受付日に来られない人、03-3555-3426。

【宇佐美 恵子記者】

家事

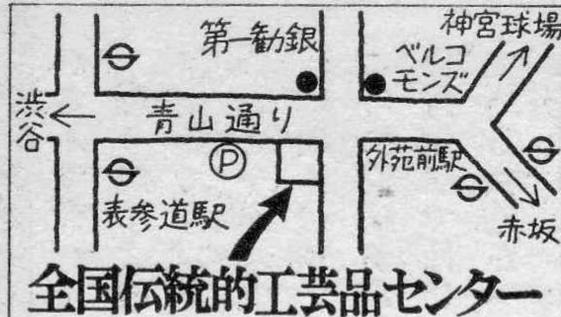


漆器は適度の湿気が大好きです

Q 塗りのお重箱の修理をしてくださるところがあると聞いています。40年前のものを使っていたのですが、最近内側が、とくに角が傷んできたので直したいのです。直していただけるころ、費用などお知らせください。

(東京都・高梁恭子・主婦)

わかりました。お教えしましょう。ところは東京・青山通りに面した『プ



ラザ246』(港区南青山3の1の1)の2階、『全国伝統的工芸品センター』(☎03-403-2460)の中にあります。名づけて『漆器病院』。傷んだ塗り物が持ち込まれると、輪島塗

の専門家が傷みのぐあいを診断し、修理してほしいと頼まれた場合は、「これだけかかりますが、いいですか」と確認して引き受けてくれるところ。もちろんこれだけというの金額と時間です。といってもこの病院、毎日開いてるわけではなく、月に1日(第2水曜日の午後1時から4時まで)だけな

のです。12月は12日、来年の1月は9日になります。高梁さんもなるべく都合をつけて、これらの日に訪ねてみてください。親切に相談に乗ってください。親切に相談に乗ってくださるはずですから。

費用ですが、たとえばお椀の場合、内塗りで約2000円(1個です)、重箱は内塗り、裏塗り、縁塗り合わせて小さいもの1段で6500円ほど、大きいものは1万円といったところ。もちろん傷みのひどさや手間の多少で違いが出てきます。

修理にかかる期間は4か月から6か月ぐらい。できあがるとはがきが届くので、受け取りに行つて代金を払うシステムです。さて、記者が訪ねた11月の「診察日」にも二十数人のご婦人がたが、風呂敷や紙袋にお椀、朱塗り・黒塗りのお重、なかには蒔絵や貝の象嵌の入った塗り物を持ってきていまし

た。「先生」は柴田康時さん。

「どんな「患者」さんが多いですか。」

「お椀ですね。ついで重箱、屠蘇器、お盆という順になりますね」

「ケガの程度は?」

「かけ、ひび割れ、はがれといったところでしょうか」

「もう少し傷んでからでいいですよ」といって修理を引き受けられなかったのがありましたね。

「ええ、漏れるというような実害がないときはそういってお返しするところがあります。せっかく直しても使わずに天井裏や天袋に放り込んでおくのではしようがありませんから」

「というところ?」

「使っていて壊れたのを直すのはこちらもうれしいんですが、使わずに、しかも悪い保存で傷めて、それを持ってこられるのはちょっとね。

漆器にかぎりませんが、食器は使えば好きになります。好きになればだいに扱ひ、だいにする心があれば手入れや保存もていねいになり、けっきょくは傷めないことにもなるんですけど」

柴田さんが「患者」を連れてきた人ごとに繰り返しておっしゃったのが「必ず下に置いてください」とい



「患者」を診察する柴田さん。入院の決まった漆器たちがいっぱいあります

うこと。天井裏や天袋に入れておく乾燥してひびが入ったりするからだそうです。

「漆も人間と同じで、適度な湿度が必要なんです。だから冬は傷みやすい。そのためにはなるべく湿気のある下のほうに置いてほしいんです」

日常の手入れとしては、使ったらぬるま湯をかたく絞った古布でよくふくこと。隅や角の汚れは割り箸を平たくけずって古布を巻き、食用油を少しつけてふくときれいに取れるそうです。

もし月に1回の「開院日」に行けないときは柴田さんのお店(漆芸しばた)新宿区信濃町32の1、☎03-355-3426)に相談を、とのこと。

筑波大学中毒110番
☎0298-51-9999
 化学薬品などを誤って使用したとき、応急手当てや対応の仕方を教えてくれる。24時間態勢なので深夜の相談も可。